

まんのう町内遺跡発掘調査報告書 第12集

中寺廢寺跡

平成25年度



2014年3月

まんのう町教育委員会



大川山 全景 土器川右岸から(右寄り中腹の白い部分が中寺廃寺跡)



D地区 第1テラスより大川山山頂を望む

[題字]金澤 正親
[表紙]中寺廃寺跡 全景

序 文

「中寺廃寺」の所在する大川山は讃岐山脈に属し、唯一竜王山とともに1,000メートルを超えております。町役場の窓から見える大川山は四季折々に緑や蒼に装い、時には白く染まり日々姿を変えてゆきます。遠くから眺めて感じる以上に、山頂付近の変化は激しいものと思われまふ。何とか車が通ることができる道が遺跡の途中まで設けられていますが、最後は徒歩での移動になります。この徒歩区間が、かつては麓から寺院まで徒歩で登っていた苦勞を強く想い起こさせます。

さて、その山上にある遺跡の発掘調査を、まんのう町教育委員会では平成16年から実施してきており、多くの成果を挙げてきておりますことは周知のとおりです。

これまでの調査から、「中寺廃寺」の概要や歴史的な位置づけは次第に明らかとなつてきており、平成20年3月28日に国指定史跡となっております。

本年度の調査は、史跡内の保存整備事業に伴うものとしては最終年度となります。今後は、これまでの調査の成果を踏まえた周辺の整備事業を継続する予定としております。

このたび、多くの方々の御高配と御尽力により、『中寺廃寺跡 平成25年度』を発刊する運びとなりました。本報告書が研究資料として広く活用されますとともに、文化財に対する理解と関心が一層深められることになれば幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査に格別の御指導と御協力を頂きました関係の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、今後とも宜しく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月

まんのう町教育委員会

教育長 齊 藤 賢 一

例 言

1. 本報告書は、まんのう町教育委員会が、文化庁の文化財補助金を受けて平成 25 年度国庫補助事業として実施した、香川県仲多度郡まんのう町造田 3469-2 他に所在する中寺廃寺跡の報告を収録した。
2. 発掘調査及び報告書の作成はまんのう町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、以下の方々のご教示、また関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)
片桐孝浩、鈴木信男、山下平重、香川県教育委員会生涯学習・文化財課、
香川県埋蔵文化財センター、農林水産省四国森林管理局香川森林管理事務所、
まんのう町文化財保護協会
4. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標第Ⅳ系の北であり、標高は T.P. を基準としている。
5. 挿図の一部に国土地理院長の承認を得て、同院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図を複製したまんのう町全図 (1:25,000、承認番号平 17 四複第 81 号) 及び、国土地理院地形図「内田」(1:25,000) を使用した。

目 次

I. 周知と活用	1
II. 調査の経緯と経過	2
III. 立地と環境	7
IV. 調査の成果	8
1. 遺構	8
(1) 保存整備事業により掘削を伴い現状が変更される箇所の確認調査	8
① 一時避難所建設予定地(A地区入口で作業道車止め部分)	8
② ベンチ設置予定地(A地区第12テラス)	10
(2) D地区	11
① 第1テラス	11
② 第2テラス	18
③ 第3テラス	18
2. 遺物	22
(1) D地区	22
① 第1テラス	22
② 第2テラス	24
③ 第3テラス	24
3. まとめ	24

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	4	第10図 D地区第1テラストレンチ3	17
第2図 平坦地分布図	5	基壇状石組群検出状況平面図	17
第3図 A地区調査地位置図	9	第11図 D地区第2・3テラストレンチ1	19
第4図 一時避難所建設予定地トレンチ配置・	10	土層断面図	19
土層断面図	10	第12図 D地区第2テラストレンチ1-1	21
第5図 ベンチ設置予定地トレンチ土層断面図	11	柱穴・基壇状石組群検出状況	21
平面図・断面図	11	平面図・断面図	21
第6図 D地区第1・2テラス平面図	12	第13図 D地区第3テラストレンチ1柱穴	22
第7図 D地区全体図	13	土層断面図	22
第8図 D地区第1テラストレンチ1平・断面図	15	第14図 D地区出土遺物実測図	23
平面図・断面図	15		
第9図 D地区第1テラストレンチ2断面図・	16		
基壇状石組群検出状況平面図	16		

表 目 次

第1表 土器観察表	26	第2表 石製品観察表	26
-----------	----	------------	----

写真図版目次

巻頭図版

大川山 全景 土器川右岸から

D地区 第1テラスより大川山山頂を望む

図版 1

一時避難所建設予定地 調査前状況 南より

一時避難所建設予定地 調査前状況 北より

図版 2

一時避難所建設予定地 トレンチ 全景 南より

一時避難所建設予定地 トレンチ 全景 北より

図版 3

一時避難所建設予定地 トレンチ 1 北壁土層断面 南より

一時避難所建設予定地 トレンチ 2 北壁土層断面 南より

図版 4

ベンチ設置予定地 調査前状況 東より

ベンチ設置予定地 トレンチ 完掘状況 全景 東より

図版 5

ベンチ設置予定地 トレンチ 完掘状況 全景 西より

ベンチ設置予定地 トレンチ 西壁土層断面 東より

ベンチ設置予定地 トレンチ 北壁土層断面 南より

図版 6

D地区 調査区全景 西より

D地区 第1・2テラス 全景 南より

図版 7

D地区 第1テラス 調査前状況 西より

D地区 第2テラス 調査前状況 西より

図版 8

D地区 第1テラス トレンチ 1 南壁土層断面 北東より

D地区 第1テラス トレンチ 1 南壁土層断面 北西より

図版 9

D地区 第1テラス トレンチ 1 遺構検出状況 東より

D地区 第1テラス トレンチ 1 遺構検出状況 西より

D地区 第1テラス トレンチ 1 礎石と掘り方 検出状況 北より

図版 10

D地区 第1テラス トレンチ 1 礎石と掘り方 半裁状況 北より

D地区 第1テラス トレンチ 2 北壁土層断面 1/3 南東より

図版 11

D地区 第1テラス トレンチ 2 北壁土層断面 2/3 南東より

D地区 第1テラス トレンチ 2 北壁土層断面 3/3 南東より

図版 12

D地区 第1テラス トレンチ 2 基壇状石組群 検出状況 北東より

D地区 第1テラス トレンチ 2 基壇状石組群 検出状況 北西より

図版 13

D地区 第1テラス トレンチ 2 基壇状石組群 検出状況 南西より

D地区 第1テラス トレンチ 3 基壇状石組群 検出状況 南より

図版 14

D地区 第1テラス トレンチ 3 基壇状石組群 検出状況 南東より

D地区 第1テラス トレンチ 3 基壇状石組群 検出状況 北より

図版 15

D地区 第1テラス トレンチ 3 基壇状石組群 検出状況 北西より

D地区 第1テラス トレンチ 3 基壇状石組群 検出状況 南西より

図版 16

D地区 第1テラス トレンチ 3 石列 検出状況 西より

D地区 第1テラス トレンチ 3 礎石 検出状況 西より

図版 17

D地区 第1・2テラス間 基壇状石組群 露出状況 東より

D地区 第1・2テラス間 基壇状石組群 露出状況 北より

図版 18

D地区 第2テラス トレンチ 1-1 南壁土層断面 北より

D地区 第2テラス トレンチ 1-1 a-a' 土層断面 北より

D地区 第2テラス トレンチ 1-1 b-b' 土層断面 東より

D地区 第2テラス トレンチ 1-1 基壇状石組群 検出状況 東より

図版 19

D地区 第2テラス トレンチ 1-1 基壇状石組群 検出状況 南より

D地区 第2テラス トレンチ 1-1 基壇状石組群 検出状況 北東より

図版 20

D地区 第2テラス トレンチ 1-2 南壁土層断面 北より

D地区 第2テラス トレンチ 1-3 南壁土層断面 北より

D地区 第2テラス トレンチ 1-5 南壁土層断面 北より

D地区 第1・2テラス間 壇状地形 南東より

図版 21

D地区 第2テラス トレンチ 1 埋め戻し後 全景 南東より

D地区 第2テラス トレンチ 1 埋め戻し後 全景 西より

図版 22

D地区 第3テラスより高松方面遠景

D地区 第3テラスより中寺庵寺跡入口方面遠景

図版 23

D地区 第3テラスより北西尾根遠景

D地区 第3テラス トレンチ 1 全景 南西より

図版 24

D地区 第3テラス トレンチ 1 調査前風景 北東より

D地区 第3テラス トレンチ 1-1 南壁土層断面 北東より

D地区 第3テラス トレンチ 1-2 南壁土層断面 北西より

図版 25

D地区 第3テラス トレンチ 1-1 遺構検出状況 西より

D地区 第3テラス トレンチ 1-1 遺構検出状況 東より

D地区 第3テラス トレンチ 1-1 礎石と掘り方 a-a' 南より

図版 26

D地区 第3テラス トレンチ 1-1 b-b' 東より

D地区 第3テラス トレンチ 1-1 c-c' 南より

図版 27

D地区 第3テラス トレンチ 1-2 南壁土層断面 北東より

D地区 第3テラス トレンチ 1-2 南壁土層断面 北西より

D地区 第3テラス トレンチ 1-2 礎石と礎石掘り方検出状況北より

図版 28

D地区 第3テラス トレンチ 1-2 遺構検出状況 東より

D地区 第3テラス トレンチ 1-2 遺構検出状況 西より

D地区 第3テラス トレンチ 1-2 e-e' 東より

図版 29

D地区 第3テラス トレンチ 1-3 南壁土層断面 北より

D地区 第3テラス トレンチ 1-3 f-f' 西より

D地区 第3テラス トレンチ 1-3 g-g' 西より

D地区 第3テラス トレンチ 1-3 h-h' 西より

D地区 第3テラス トレンチ 1-3 i-i' 北より

D地区 第3テラス トレンチ 1-3 全景 東より

図版 30

出土遺物

図版 31

出土遺物

図版 32

出土遺物

I. 周知と活用

町内文化財の周知と活用を図るため、外部団体からの見学・講演依頼による講師派遣、琴南ふるさと資料館と旧仲南北小学校民具展示室の常設展示、町内公共機関でのパンフレットの常設、まんのう町文化祭と琴南地区文化祭での文化財関連の展示、発行物への寄稿等を行っている。本年度の傾向としては、現在整備工事中である中寺廃寺跡の現地見学が減少しているが、整備後初めて町外の団体が訪れた民具展示室を含め、資料館の利用が増加している。

活動実績

実施日	行事名	参加者数
H25.5.22	琴南公民館通学合宿 琴南ふるさと資料館見学・土器接合体験	12
H25.6.6	香川県文化財保護協会仲多度支部研修会 旧仲南北小学校民具展示室見学	33
H25.6.22	まんのう町文化財保護協会琴南支部総会 講演「国指定史跡中寺廃寺跡活用に向けての保存整備」	32
H25.6.27	一般団体 大川山登山途中の中寺廃寺跡見学	25
H25.7.7	まんのう町宮田自治会 宮田公民館祭り 旧仲南北小学校民具展示室開放	25
H25.7.17	琴南ふるさと資料館展示 香川県埋蔵文化財センター「讃岐国府を探る4」	50
H25.8.20	まんのう町立四条公民館 夏休み教室「火起こし体験」	23
H25.9.7	三木町文化財保護協会臨地研修 旧仲南北小学校民具展示室見学	25
H25.10.24	琴南小学校 琴南ふるさと資料館見学	10
H25.11.2	琴南地区文化祭 琴南ふるさと資料館開放	-
H25.11.24	伝統芸能の町まんのう2013フォトコンテスト	21
H25.11.24	まんのう町文化祭文化財展	305

活動の様子



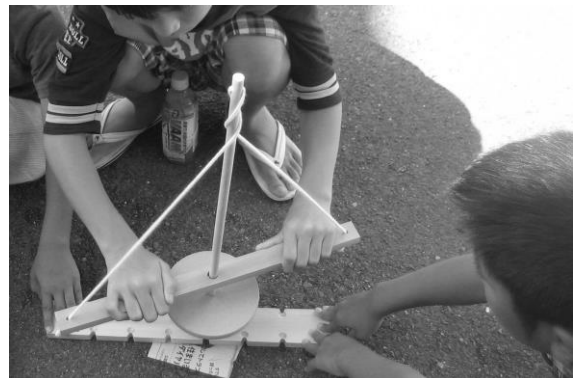
H25.5.22 琴南公民館通学合宿 土器接合体験



H25.6.27 大川山登山途中の中寺廃寺跡見学



H25.7.7 宮田公民館祭り 民具展示室開放



H25.8.20 四条公民館 火起こし体験

II. 調査の経緯と経過

中寺廃寺跡付近では、「中寺」「信が原」「鐘が窪」「松地谷」といった寺院に関する地名が存在することや、寛政 11(1799)年に記された『讃岐廻遊記』中に「中寺」の表記があること、近隣集落には大川七坊と呼ばれる寺院が山中に存在したという伝承が残っていることから、近年、寺院の存在が示唆されてきた。しかし、寺院の詳細が記された文献は未確認であり、永らく幻の寺院であった。

昭和 56 年度

分布調査を実施し、現在の A 地区付近において数箇所平坦地を発見した。

昭和 59 年度

ボーリング棒による調査により、A 地区第 2 テラスで礎石を確認した。また A 地区第 3 テラスで試掘調査を実施し、塔跡を確認した。塔心礎石の下部より地鎮・鎮壇具と想定される 10 世紀前半の遺物が出土した。

平成 15 年度

字中寺全域の詳細分布調査を実施し、遺跡が約 1km の範囲に展開していることを確認した。この範囲を大きく 4 つの地区に分け、それぞれを A～D 地区とした。

平成 16 年度

中寺廃寺跡調査・整備委員会を組織し、調査の長期計画を作成した。A 地区第 2・3 テラスの発掘調査を実施し、仏堂跡・塔跡を確認した。これら仏堂と塔は計画的に配置された中枢伽藍であり、A 地区は中寺廃寺の中心的な地区であったと推定された。また、文献調査により、寺は 19 世紀前半にはすでに名称不明の状態にあり、現在の D 地区付近における寺跡の存在が伝承されていたことが判明した。

平成 17 年度

B 地区の発掘調査を実施し、礎石建物跡(仏堂もしくは割拝殿)・僧房跡を確認した。僧房跡より西播磨産須恵器多口瓶片、越州窯系青磁碗片が出土し、中寺廃寺が貴重品を取り寄せることのできる有力な寺院であったことが推定された。

平成 18 年度

C 地区の発掘調査を実施し、石組遺構を確認した。平安時代に記された仏教行事に関する史料『三宝絵詞』に、平安時代中頃には石を積んで石塔とする行為が一般の民衆に広がっていたという記述があることから、石組遺構は平安時代の石塔であると考えられ、祭祀的な意味合いの強い地区であると推察された。

平成 19 年度

A 地区第 4 テラスの発掘調査を実施し、大炊屋跡を確認した。大炊屋跡では、築竈跡を検出し、多量の食器・調理具類が出土した。平成 18 年度までの調査結果から、当寺院跡が地方における古代山林寺院の展開の様相を具体的に示し、遺存状況も良好であるとして、平成 20 年 3 月 28 日、国の史跡に指定された。

平成 20 年度

B 地区第 1・2 テラスの発掘調査を実施し、第 1 テラスでは礎石と据え付け掘り方跡、溝跡を確認した。第 2 テラスではテラス中央を南北に走る排水溝を挟み、東西にそれぞれ 1 棟ずつ配された僧房跡を確認した。流土層より佐波理加盤が出土した。

平成 21 年度

A 地区第 12 テラスと B 地区第 2・3 テラスの発掘調査を実施した。平成 17 年度の調査成果も含めて考察したところ、B 地区第 3 テラスはテラス中央 1 棟のみの建物配置であることがわかった。また B 地区では 8 世紀後半、9 世紀後半～10 世紀前半の遺物が特に多く出土しており、当寺院跡の中で最初に営まれた地区であると推定された。B 地区第 3 テラスより古密教の様相を呈する銅錫杖頭、銅三鈷杵が出土した。

平成 22 年度

A 地区第 11 テラスにおいて仏堂・塔に関連する遺構を、A-B 地区間連絡道において大川神社や C 地区との連絡道を、B 地区第 3 テラス西側斜面においてテラスの切岸を確認することを目的とした発掘調査を実施したが、明確な遺構は確認できなかった。

平成 23 年度

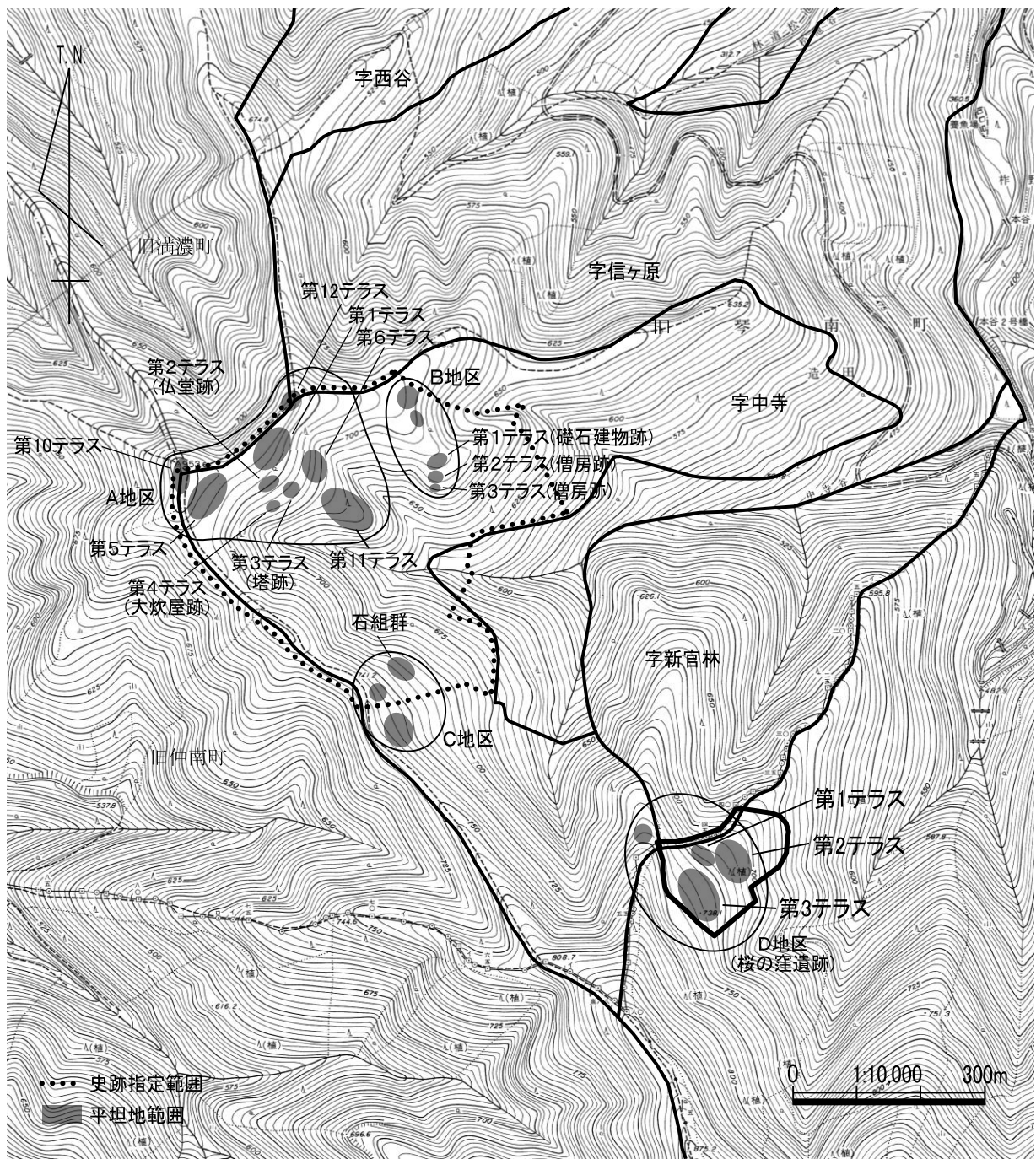
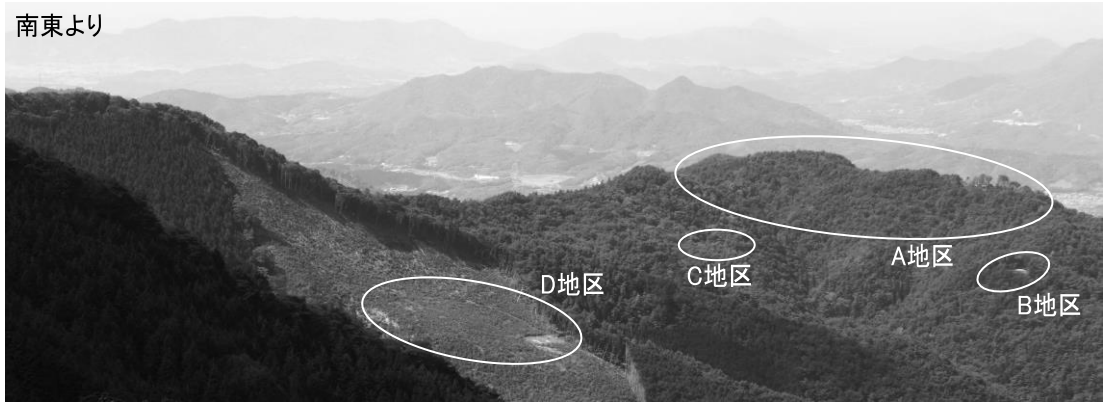
史跡内の保存整備事業を開始した。掘削を伴い現状が変更される箇所について事前に調査を実施した。遊歩道敷設箇所、仏ゾーン説明板設置箇所(A 地区第 3 テラス)、柞野・江畑道導入部案内板設置箇所(A 地区第 12 テラス)、道標設置箇所の遺構の確認調査を実施したところ、明確な遺構は確認できなかった。

平成 24 年度

昨年度に続き、保存整備事業によって掘削を伴い現状が変更される箇所についての事前の確認調査を実施した。祈ゾーン説明板設置予定地(B 地区第 1 テラス)、大川道導入部案内板設置予定地、道標設置箇所、遊歩道(ねがい坂)敷設予定地、願ゾーン説明板設置予定地(C 地区)の 5 地点について掘削調査を行ったが、いずれの箇所についても明確な遺構は確認できなかった。



第1図 遺跡位置図



第2図 平坦地分布図

本年度

保存整備事業によって掘削を伴い現状が変更される箇所についての事前の確認調査と、D地区の試掘調査を実施した。

保存整備事業に関係する確認調査は、一時避難所建設予定地(A地区入口で作業道車止め部分)、ベンチ設置予定地(A地区第12テラス)の2地点について掘削調査を行った。

D地区については、あらゆる制約により急遽、部分的な試掘調査が決定した。国有林内に位置するD地区は、昭和59年に桜の窪遺跡として、周知の埋蔵文化財包蔵地の台帳に記載された。中世から近世の遺物が表採され、近接する古代山林寺院中寺廃寺跡との関連が推測されていたが、平成15年度以降、A～C地区の本格的な調査が進む中、桜の窪遺跡はD地区と認識された。A～C地区は平成20年3月28日に国の史跡に指定され、D地区については、緑のオーナー制度の規制がかかる植林伐採後まで、確認調査の機会を待ち、その成果によって史跡への追加指定を検討する予定となっていた。平成23・24年度、緑のオーナー制度の植林が皆伐され、中寺廃寺発掘調査室では付近一帯の地形測量を実施する等、確認調査に向けての準備に取り掛かった。しかし、水源かん養保安林の規制により伐採後2年以内、平成25年度末までの植栽義務が発生することが判明し、まんのう町教育委員会では対応しきれない事態となり、広域的な発掘調査は断念せざるを得ない状況となった。

D地区は一旦植栽が行われると、その後50～60年は再び植林下に眠ることとなる。既に平成23・24年度伐採済みの樹木根は下部の遺構面を破壊しており、新たな植栽は現在残る切株間に行われることから、残る遺構面が壊滅的状況となることは必至である。遺構が失われる前にD地区の遺構の内容や、A～C地区との関連性について少しでも多くの情報を得るべく、四国森林管理局香川森林管理事務所が実施する植栽事業の開始までに、試掘許可が下りた28㎡において試掘調査を実施した。調査後すぐに、香川県教育委員会生涯学習・文化財課に調査成果を報告し、香川県教育委員会生涯学習・文化財課が四国森林管理局香川森林管理事務所と協議の上、部分的な保護箇所の調整を行った。

試掘調査に先行し、平成25年7月11日付「保安林内作業許可申請書」を香川県西部林業事務所長へ提出した。また平成25年7月19日付「国有林野入林許可申請書」を四国森林管理局長へ提出した。両申請許可後、調査に着手した。

調査は、まんのう町教育委員会が調査主体となり、社会教育課中寺廃寺発掘調査室が担当した。平成25年9月9日に開始し、平成25年11月8日に終了した。

Ⅲ. 立地と環境

史跡中寺廃寺跡が所在するまんのう町は、香川県中部(中讃)に位置し、東は綾川町・高松市、西は三豊市、北は丸亀市・善通寺市・琴平町、南は徳島県美馬市・三好市・東みよし町に接している。町の面積は 194.33 km²、人口は約 2 万人である。町の南部及び南西部には、標高 1,000m を超える竜王山(1059.9m)、大川山(1042.9m)を主峰とする讃岐山脈が連なり、その麓を県下唯一の一級河川である土器川が北流している。土器川を溯り、讃岐山脈の分水嶺となる三頭峠まで登り詰めると、切り立つように急峻な眼下に、東に向けて滔々と流れる吉野川を望むことができる。対岸には剣山を擁する四国山地の山並が続く。

まんのう町には、古くから讃岐・阿波間を結ぶ峠越えの道が数多く通っている。こうした峠越えの道は先史時代より存在していたと考えられ、これらの道が古代には官道として、中世には修験道者の道や軍用道として、近世には金毘羅街道として整えられ、讃岐山脈を挟む南北地域間の交流に利用されてきた。中でも三頭峠は、金毘羅五街道の内的一本、阿波街道であり近代まで通行量の多い道であった。現在では、猪ノ鼻トンネル・三頭トンネルが香川・徳島間の主要な往還となっている。

史跡は、香川県と徳島県を分かち讃岐山脈第 2 の主峰、大川山の香川側山間部に位置する。大川山頂より西北西約 2.5km、標高約 700m の地点に、小尾根から東南東へ開けた谷があり、この谷を囲む東西 400m、南北 500m の範囲に分布するテラスが史跡中寺廃寺跡である。テラス群は分布状況から、標高が最も高く谷部に位置する A 地区、谷の北側に位置する B 地区、B 地区と谷を挟んで向かい合う C 地区の 3 地区に大きく分けられる。史跡指定面積は 187,713.16 m²である。これら 3 地区は、現在では樹木が生い茂り見通しが悪いが、谷を隔ててお互いを見通すことが可能である。尾根上のテラスからは、ほぼ香川県全域を見渡すことができる。山腹のテラスからは、尾根に遮られるため遠望することはできないが、B 地区南東方向の視界は大きく開けており、古くから信仰されてきた大川山を望むことができる。

現在、中寺廃寺跡へは大川山麓の集落である中通、江畑、柞野から入る。大川山山頂や讃岐山脈尾根筋からは、北に日本最大の灌漑用ため池である満濃池が潤す平野部を、南に四国山地の雄大な広がり一望できる。江畑、柞野へと至る道は、古来より大川神社や金毘羅宮の参拝道として、また炭焼き、林業に携わる地元住民の生活道として利用されてきた。これらの道は、麓では前述の街道へと続き、奥では峠越えの道へと登る。

IV. 調査の成果

1. 遺構

本年度の発掘調査は、保存整備事業により掘削を伴い現状が変更される一時避難所建設予定地(A地区入口で作業道車止め部分)、ベンチ設置予定地(A地区第12テラス)の2地点と、D地区の一部で実施した。

(1) 保存整備事業により掘削を伴い現状が変更される箇所の確認調査

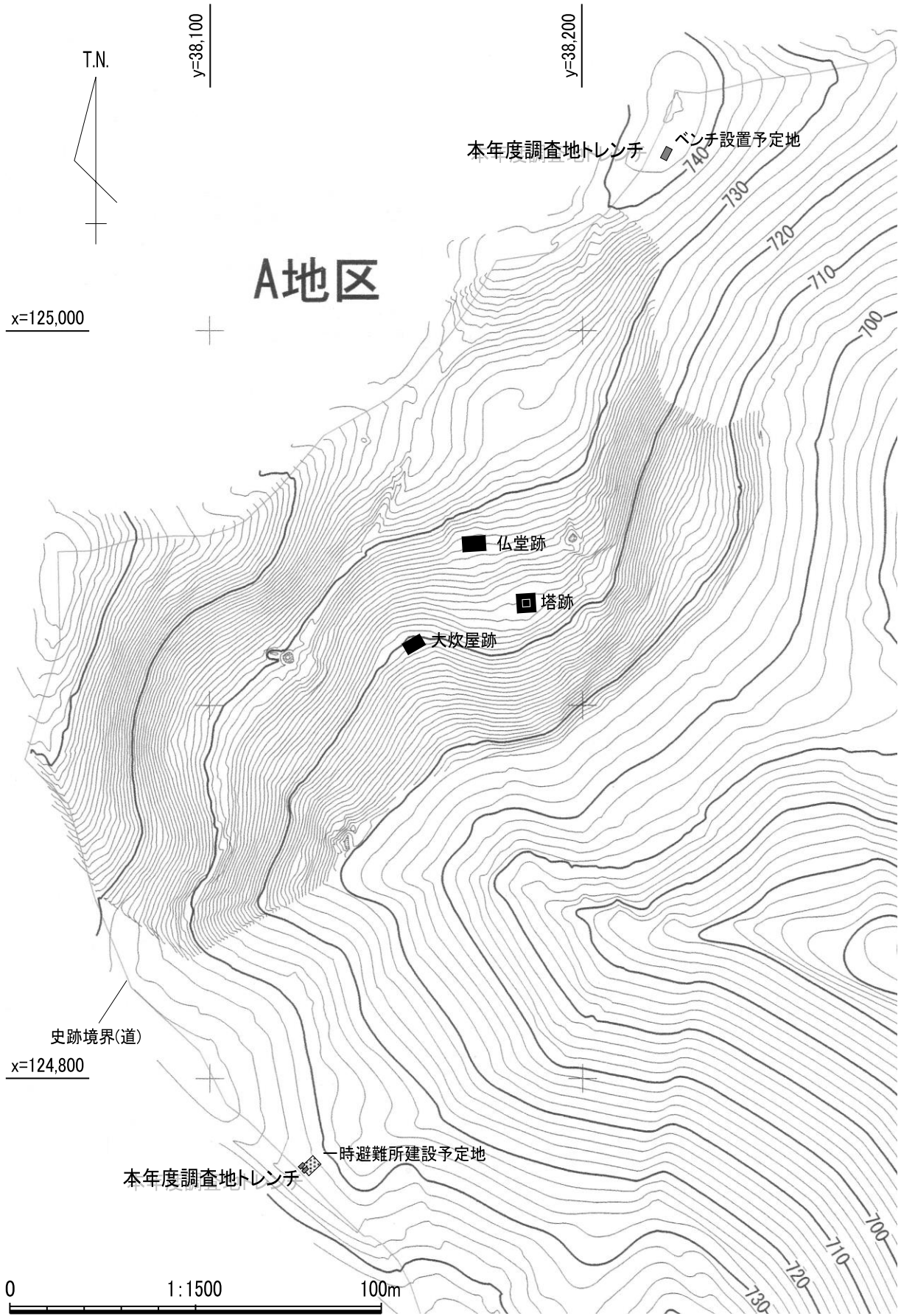
A地区は、史跡の中央部、標高約680～753mに位置する全12箇所のテラス群で、史跡範囲北西端の三角点から南東側面に分布する。テラスは、尾根の頂上に位置するテラス2箇所を除けば、全てが尾根を背にし、南東側の谷に向かって広がる。第2・3テラスは、北の山側を切土し、南の谷側に盛土することによって造成され、主な施設として、第2テラスで仏堂跡、第3テラスで塔跡、第4テラスで大炊屋跡を確認した。

塔跡と仏堂跡はともに真南を向き、仏堂跡は塔跡より4m高い場所に立地し、その正面に広場を造成する。讃岐国分僧寺と同じ大官大寺式伽藍配置と見られることから、中枢伽藍が造営された、中寺廃寺の中心的な地区であると考えている。

① 一時避難所建設予定地(A地区入口で作業道車止め部分)

『史跡中寺廃寺跡保存整備実施計画』において、整備に伴い大川山登山者や遺跡見学者の増加が見込まれる点、登山者や見学者が急な天候の変化によって危険に晒された場合の備えが必要である点より、軽車両が進入できる最奥地点に待避スペースを伴うトイレの設置が計画された。計画された場所は、A地区(仏ゾーン)とC地区(願ゾーン)結ぶ大川道途中のA地区寄り、古くより大川山参拝や讃岐～阿波間の峠越えとして通行されていた道の一部である。元は北西と南東に緩やかに登る道の谷部で、北東と南西が斜面となっている馬の背状の細い道であった。現在は、発掘調査を行うため平成15年に北西と南東斜面を削り込み、搬入した花崗土を敷いた拡張工事を行い、作業道最奥の駐車スペースとして利用している。

一時避難所の建屋基礎が地表より30cm掘れ込むことから、確認調査が必要となった。しかし、平成15年の拡張工事の際に、多いところで地表より約60cmの削平を受けていることから、一時避難所建設によって現状が変更される箇所で、元の道の地表面が残存する部分のごく限られた範囲と推定された。そこで、北西寄りに道と直交するトレンチ2箇所を設定した。



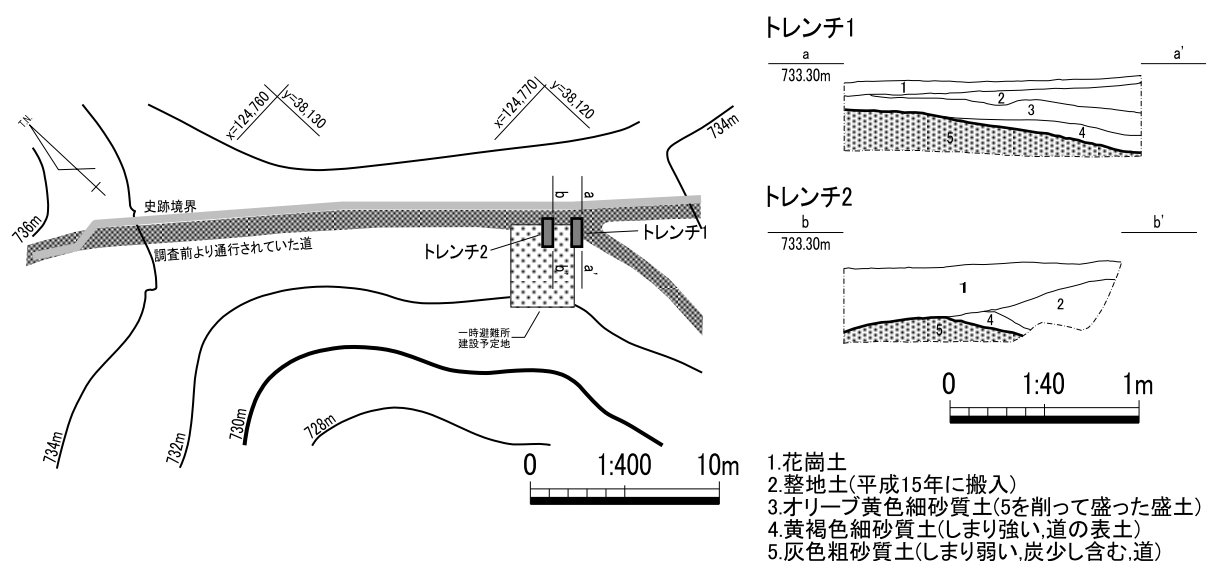
第3図 A地区調査地位置図

トレンチ 1

標高 733.20m から 733.23m にかけて、南西から北東へ 1.57m、幅 0.5m で設定した。土層序は花崗土、整地土、地山を削って谷側に盛った盛土、道の地山から成る。遺構面は検出されず、遺物も出土しなかった。道はやはり平成 15 年の造成により馬の背状の上部が削平を受けており、削平された土は南東谷側の盛土として利用されていた。

トレンチ 2

標高 733.11m から 733.15m にかけて、トレンチ 1 と平行に 1.46m、幅 0.5m で設定した。土層序は花崗土、整地土、道の地山から成る。遺構面は検出されず、遺物も出土しなかった。道の南西側肩を検出した。



第4図 一時避難所建設予定地 トレンチ配置・土層断面図

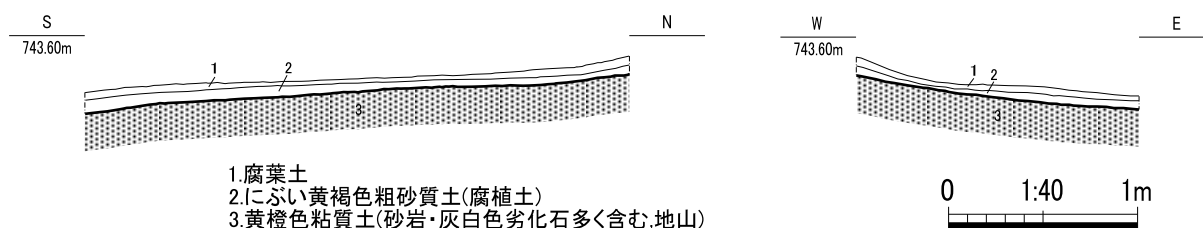
②ベンチ設置予定地 (A 地区第 12 テラス)

『史跡中寺廃寺跡保存整備実施計画』において、大川山山頂を間近に眺望することができ、なぜ中寺廃寺がここに位置したかを体感できる場所であること、柞野・江畑からの導入部であり、登山者の休憩所として時間的、距離的に適していることなどから展望台の一施設として固定式ベンチ設置が計画された。計画された場所は、小尾根山頂部より南へ約 10m の大川山が正面に見える東斜面で、平成 23 年度設置済みの案内板隣りである。現在は展望を確保するため高木を伐採しているが、元は東へと下る雑木林の斜面部である。

固定式ベンチのため基礎部分が現地表面から最大で 45cm 埋め込まれ、遺構面が影響を受けるため掘削調査を行った。掘削範囲は標高 743.30m から 743.50m にかけて、東西 1.49m、南北 2.87m で設定した。

当小尾根は西からの風雨が強いいため流土は確認されず、腐葉土層、腐植土層が薄く堆積

していることを確認した。遺構面は検出されず、遺物も出土しなかった。



第5図 ベンチ設置予定地トレンチ土層断面図

(2)D 地区

D 地区は、大川山山頂より北西へ約 1,800m、史跡指定地区より南東へ約 890m に位置し、標高 700～735m に凡そ 3 つのテラスが分布する。テラスは A 地区と同じく西の尾根を背にし、南東側の谷に向かって広がる。谷の向こうには大川山山頂を望むことができる。

天保 6(1835)年の旧造田村庄屋文書『西村家文書』の『日帳』に名所・古跡として登場する「中寺堂所」とであると推定される。また中寺廃寺跡の史跡指定部分より直線で約 890m と程近く、標高や立地条件なども酷似していることから、史跡指定部分との関連性を持つ寺院遺構の存在を念頭に試掘調査を実施した。調査に際しては、往路が 30～45 度の斜面を下るため調査道具の運搬が困難であり、復路の伐開・整備を行った。また調査区内は厚く積み重なった末木枝条(伐採された枝)と、いばらの繁茂によって見通しの利かない状態であった。非常に時間的にも物理的にも限られた中での調査となった。

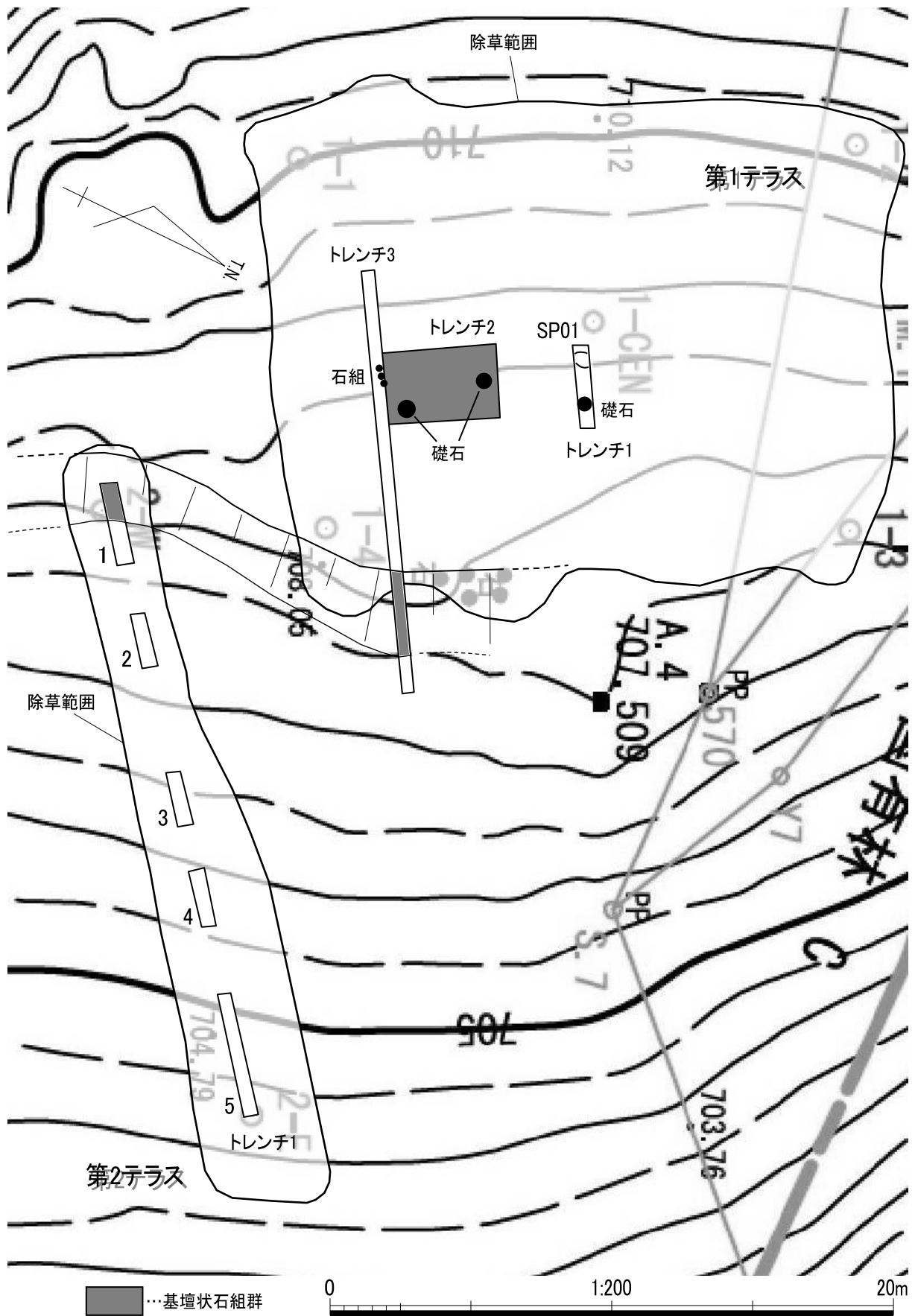
踏査の段階で、明確なテラスが広がる点や、各々のテラスの面積が大きい点、テラスと山側傾斜面の変化が明確である点、テラス山側の傾斜角度が周囲の傾斜角度よりも大きい点などから、自然地形ではなく中寺廃寺跡の史跡指定範囲でも見られるような、山側を切土し、谷側に盛土するといった造成を行っていると考えていた。植林伐採後、少し離れた高所よりの観察では、テラスの面積や、造成の規模は史跡指定範囲内の A 地区や B 地区を大きく上回ると思われる。

①第 1 テラス

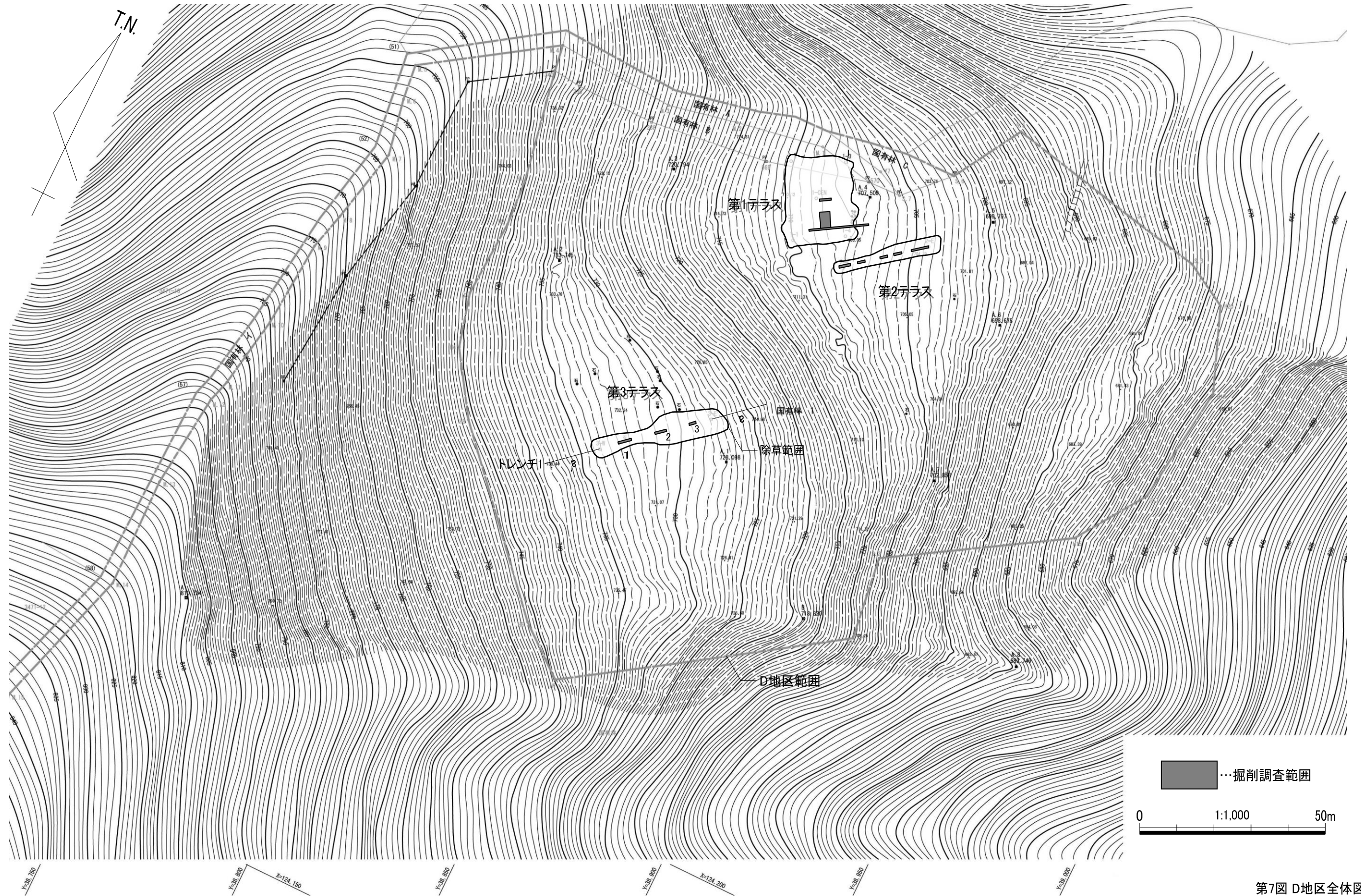
北東に位置し D 地区内テラスの中段である。中央部の標高は 708.5m、地形図上の面積は約 545.8 m²である。植林伐採以前の踏査時に、地表面に現れていた基壇と見られる石組群を確認しており、寺院関連の重要な施設が置かれていた可能性がある。D 地区内のテラスの中で平坦面が最も広いことから、斜面に比べ遺構の残存率も高いと考えられる。

トレンチ 1

テラスの中央部、標高 708.15m から 708.69m にかけて、傾斜に並行する東西に長さ 3.36m、

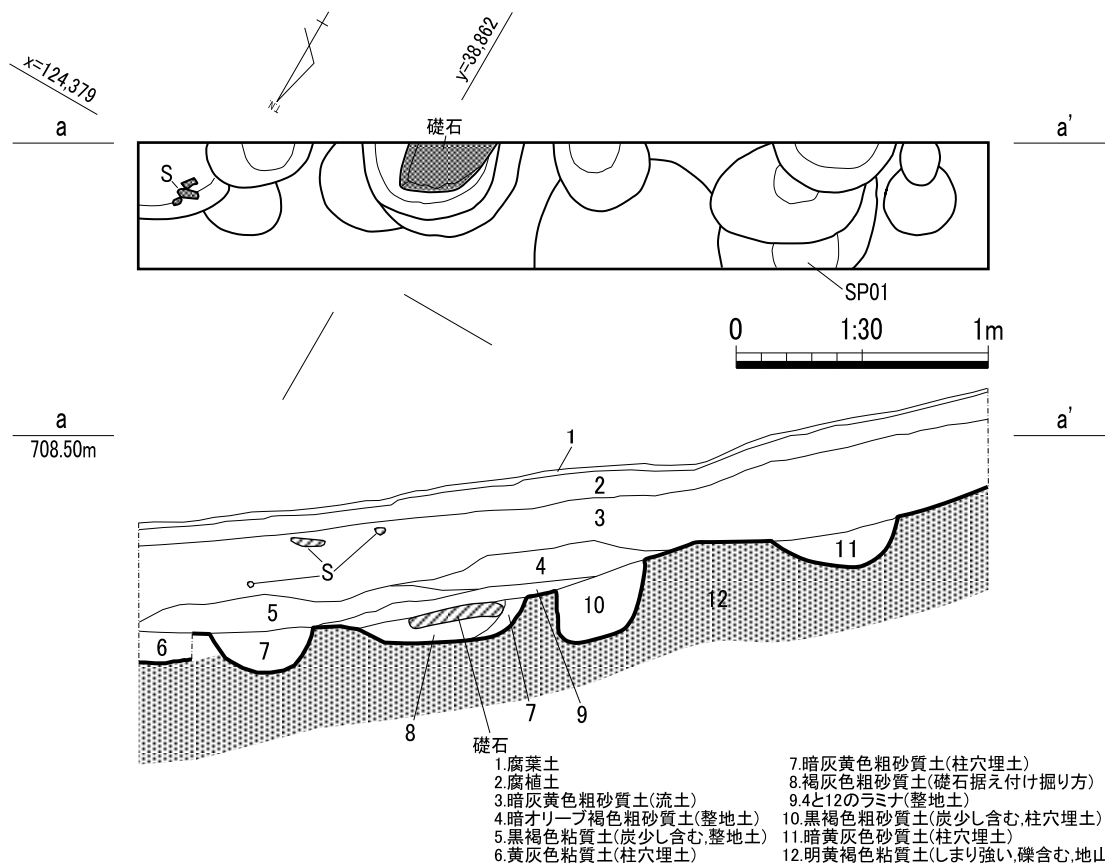


第6図 D地区第1・2テラス平面図



第7図 D地区全体図

幅 0.5m で設定した。地山までの深さは 30~48cm で、土層序は、腐葉土層、腐植土層、流土層、整地土層から成る。谷側に盛土した平坦面造成の痕跡が確認できる。整地土上で柱穴 11 基、掘り方を持つ礎石 1 基を検出した。SP01 から 9 世紀後半~10 世紀前半の須恵器壺底部が出土した。



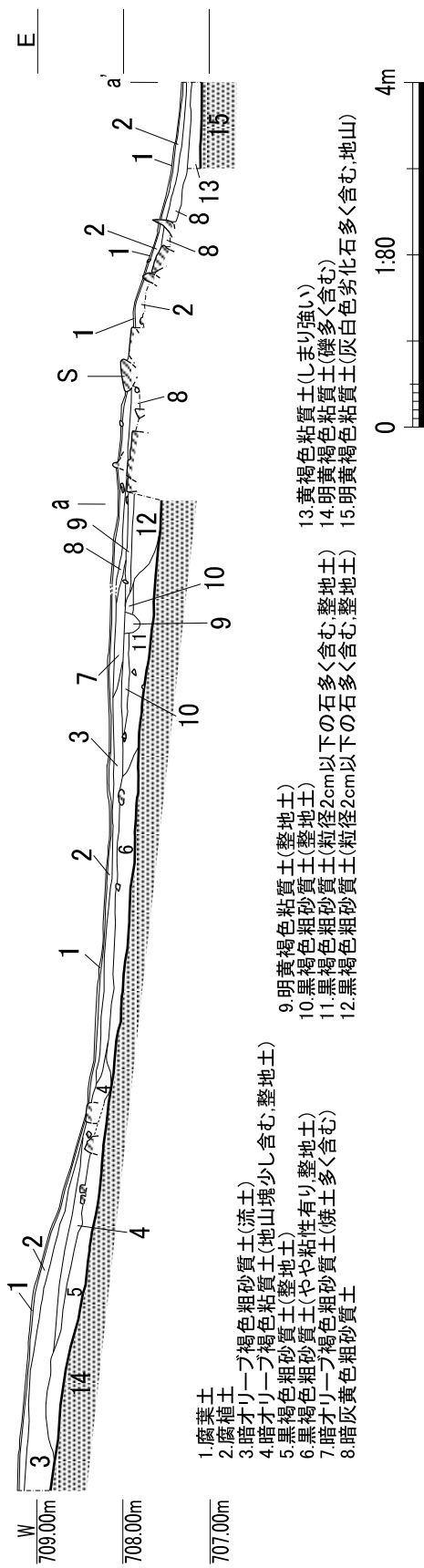
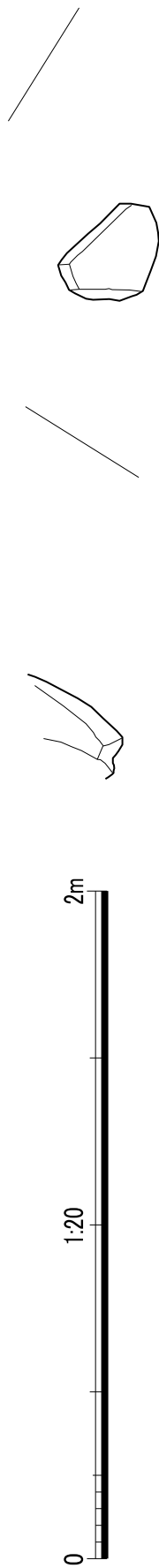
第8図 D地区第1テラストレンチ1平・断面図

トレンチ 2

テラス南部で明確な段差が見受けられる箇所である。標高 707.32m から 709.23m にかけて、傾斜に並行する東西に長さ 16.34m、幅 0.5m で設定した。地山までの深さは 25~58cm で、土層序は、腐葉土層、腐植土層、流土層、整地土層から成る。谷側に盛土し、盛土の端に石を張り、基壇と見られる壇を造成した痕跡が確認できる。整地土上で柱穴 3 基、基壇状石組群 2 か所を検出した。

トレンチ 3

トレンチ 2 で検出した基壇状石組群 2 か所のうち山側の 1 か所について、石組群の連続性を確認するため北方向へ設定した。標高 708.270m から 708.822m にかけて、南北 4.3m、東西 2.8m で設定した。深さは石組群を検出するに留めたため、腐葉土層、腐植土層の約 10~25cm を掘削した程度である。基壇南辺の可能性のある連続する石組、1 辺が 60~70cm



第9図 D地区第1テラストレンチ2 断面図・基壇状石組群検出状況平面図



第10図 D地区第1テラストラレンチ3 基壇状石組群検出状況平面図

の礎石 2 基、中心に加工痕のある礎石 1 基を検出した。掘削範囲全体から石群を検出したが、約 50%は植木の根や自然の転落により、元の位置から移動していると見られる。

②第 2 テラス

第 1 テラスの南東に位置し、D 地区内テラスの下段である。中央部の標高は 706.5m、地形図上の面積は 734.1 m²である。第 2 テラスから第 1 テラス方向を臨むと、自然地形ではない明確な段差が確認できる。第 1 テラスに基壇を想定した場合、基壇下のテラスにあたることから、基壇上の礎石建物に付随する施設が置かれていたと推測される。

トレンチ 1

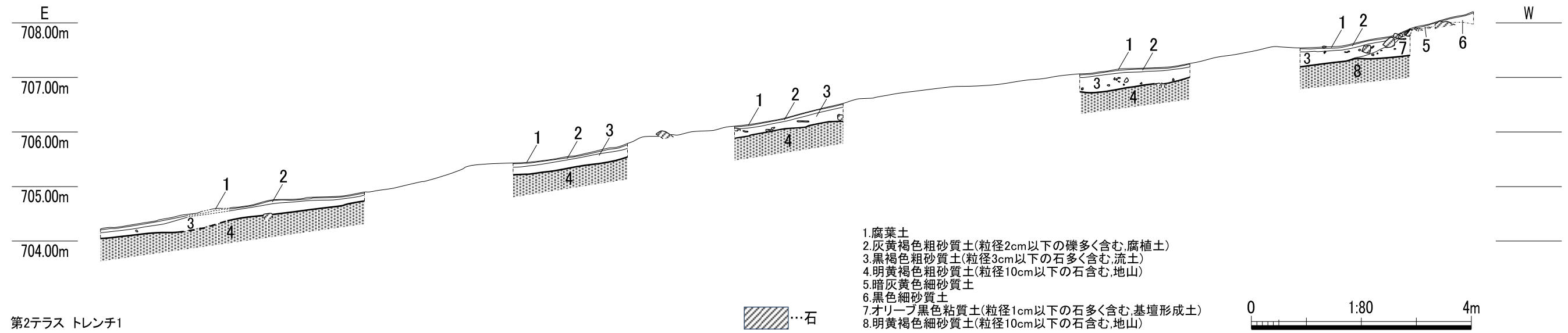
テラスのやや北寄り、標高 704.23m から 708.20m にかけて傾斜並行よりやや北に振った南北に、長さ 26.1m、幅 0.5m で設定した。全掘削が不可能であったため、伐採木の根を避けて 5 か所を掘削調査した。地山までの深さは 16～37cm で、土層序は、腐葉土層、腐植土層、流土層、整地土層から成る。谷側に盛土した平坦面造成の痕跡が確認できる。トレンチ 1-1 の地山上で柱穴 3 基を検出した。トレンチ 1-1 西壁で第 1 テラスのトレンチ 2 南端から連続すると思われる、基壇状石組群を検出した。

③第 3 テラス

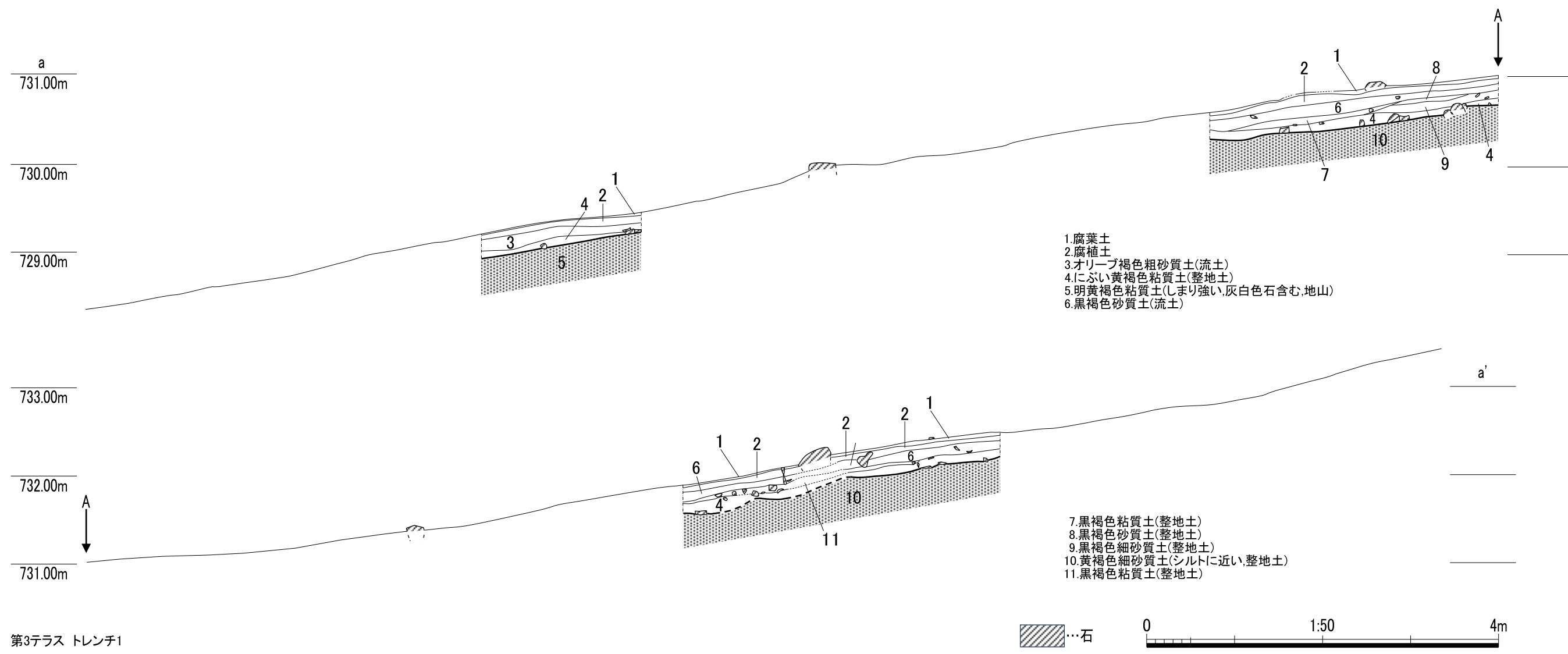
第 1 テラスの南西に位置し、D 地区内テラスの上段である。中央部の標高は 731.0m、地形図上の面積は 935.3 m²である。植木伐採以前の踏査時に、礎石建物跡とみられる連続する礎石を確認しており、第 1 テラスと同じく重要な施設が置かれていたと推測される。トレンチ 1 周辺でも、礎石と見られる石を複数確認している。

トレンチ 1

テラスの中央部、標高 728.35m から 733.43m にかけて傾斜に並行する東西に長さ 31.44m、幅 0.5m で設定した。全掘削が不可能であったため、伐採木の根を避けて 3 か所を掘削調査した。地山までの深さは 23～30cm で、土層序は、腐葉土層、腐植土層、流土層、整地土層から成り、谷側に盛土した平坦面造成の痕跡が確認できる。トレンチ 1-1 の整地土上で柱穴 4 基、掘り方を持つ礎石 1 基を検出した。トレンチ 1-2 の整地土上で柱穴 4 基、掘り方を持つ礎石 1 基を検出した。トレンチ 1-3 の地山上で柱穴 4 基を検出した。基壇については地表面上を目視した限りでは確認できず、トレンチ 1-1 と 1-2 の礎石周辺で石群を確認した。これらが基壇を形成する石群である可能性もあるが、調査範囲が限定されている今回の状況では明確なことは言及できない。

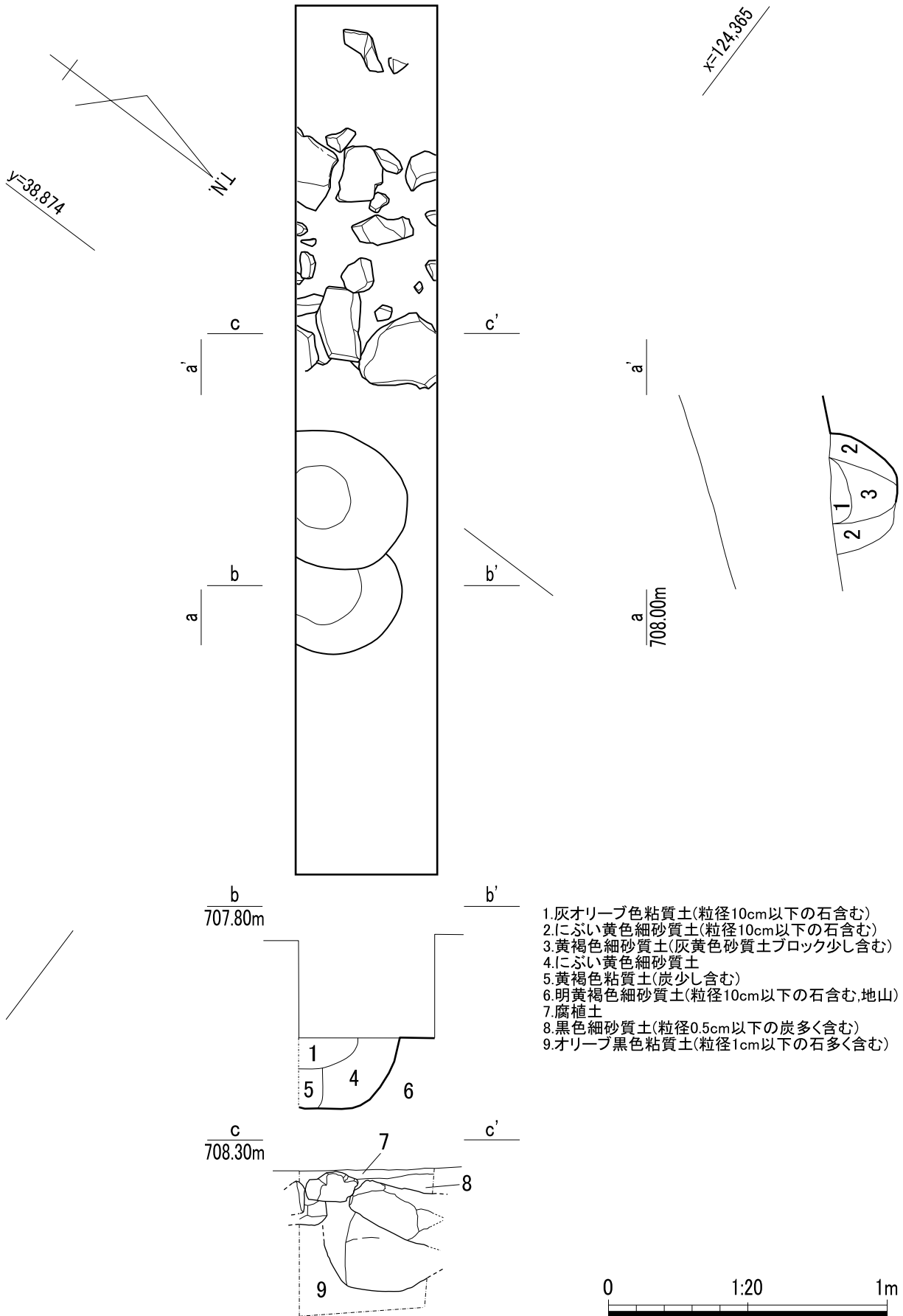


第2テラス トレンチ1

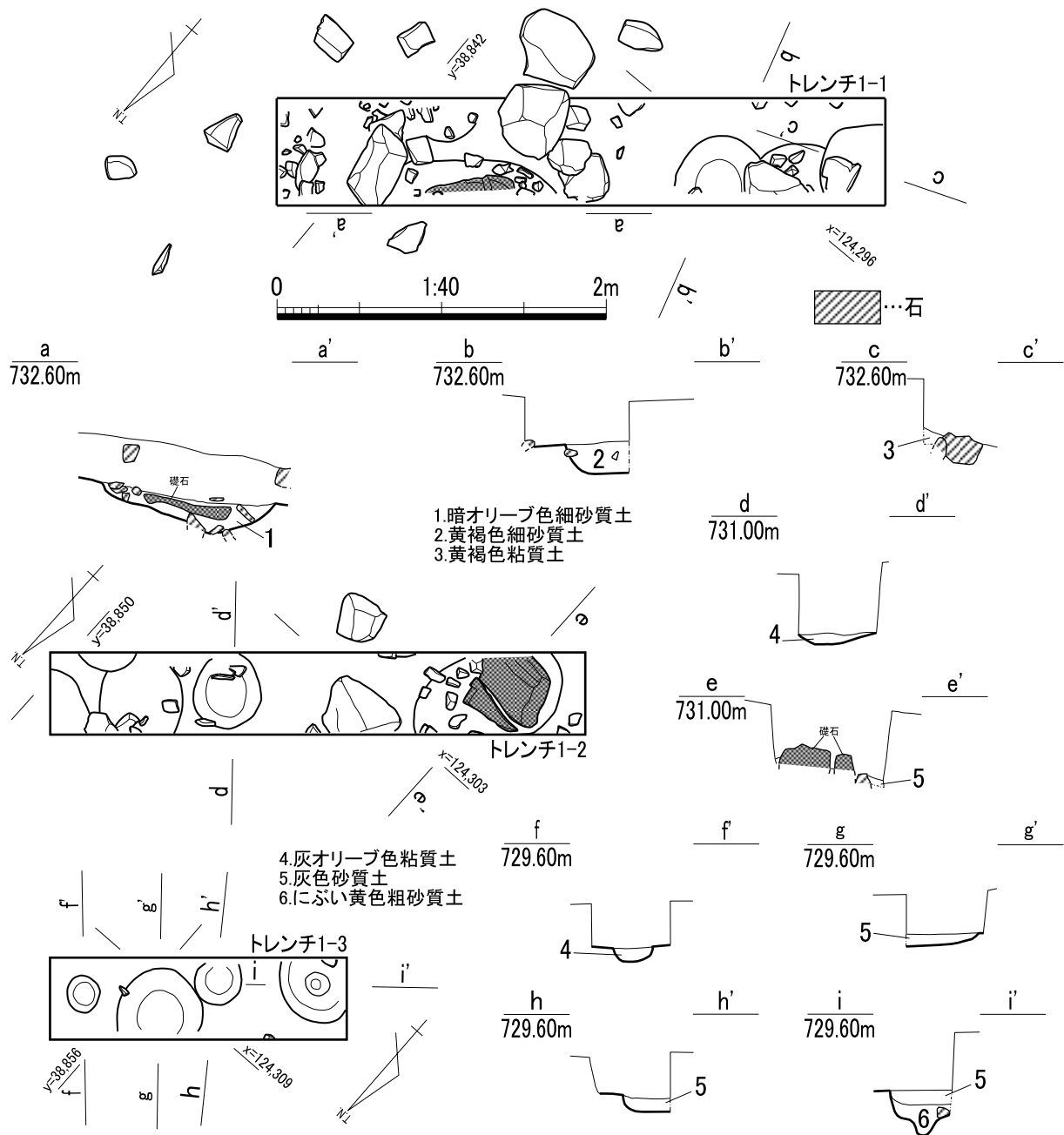


第3テラス トレンチ1

第11図 D地区第2・3テラス トレンチ1土層断面図



第12図 D地区第2テラストラレンチ1-1 柱穴・基壇状石組群検出状況平面図・断面図



第13図 D地区第3テラストレンチ1柱穴土層断面図

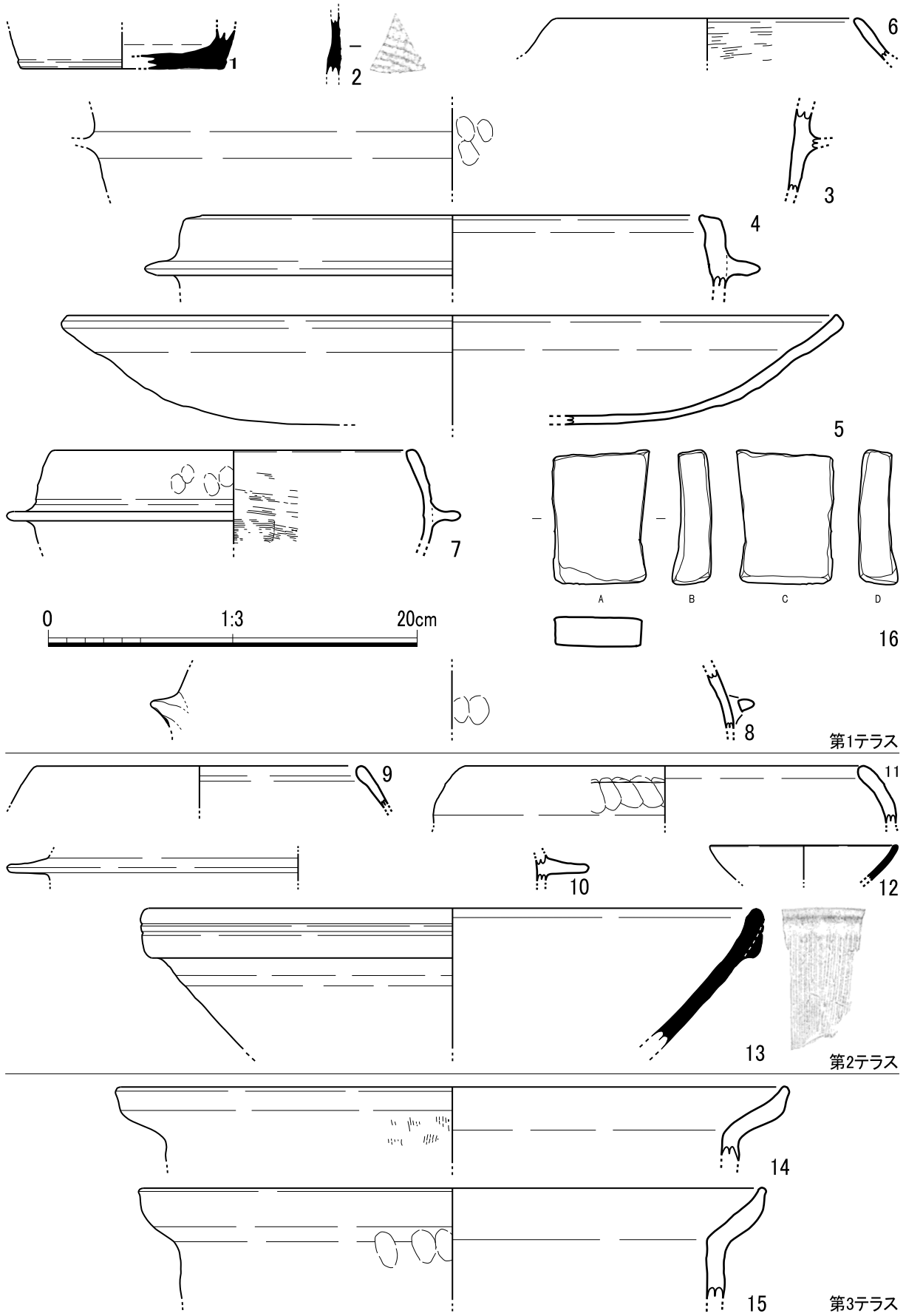
2. 遺物

(1) D 地区

D 地区では 280 コンテナに換算して約 2 箱分、取り上げ点数 51 点の遺物が出土した。出土遺物の種類は須恵器・土師質土器・土師器・瓦質土器・磁器・備前焼・砥石・石臼等で、時期は古代及び近世であった。

① 第 1 テラス

1～8 及び 16 は D 地区第 1 テラスから出土した遺物である。1 はトレンチ 1 にて検出した SP01 埋土中より出土した。2 はトレンチ 3 基壇整地土中より出土した。3 はトレンチ 2 地



第14図 D地区出土遺物実測図

山直上より出土した。4は第1テラスにて表採した。5・6はトレンチ2流土中より出土した。7はトレンチ3流土中より出土した。8はトレンチ3腐植土中より出土した。16はトレンチ3腐葉土中より出土した。

1は須恵器壺である。焼成は堅緻で内外共に灰色を呈する。底部は平たくへら切りの痕跡が確認できる。2は須恵器甕である。焼成は堅緻で外面は灰オリーブ色、内面は灰色を呈する。外面に約3mm間隔の格子叩きを施し、内面はナデを施す。3・4は土師質土器土釜である。3は口縁部が外傾し外面に鏝が付く。4は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり口縁端部を僅かに上方に摘み出し、外面に鏝が付く。5は土師器焙烙である。6～8は瓦質土器羽釜である。6・7は内面にハケ目が確認できる。8は1孔の耳が付く。16は砥石である。流紋岩製でA・B・C・D面が研磨されている。

1～4の時期は9世紀後半～10世紀前半と考えられる。また1は中寺廃寺跡A地区塔跡の心礎石下部より出土した須恵器壺と類似している。5～8の時期は近世以降と考えられる。またトレンチ3より凝灰岩製の石臼17が出土した。図版に写真のみ掲載した。

②第2テラス

9～13はD地区第2テラスから出土した遺物である。9・10はトレンチ1-1流土中より出土した。11はトレンチ1-2付近にて表採した。12はトレンチ1-2流土中より出土した。13はトレンチ1-5流土中より出土した。

9～11は瓦質土器羽釜である。11の外面には粘土の接合部に施された指押えが確認できる。12は磁器碗である。内外面に緑釉が施される。13は備前焼の播鉢である。口縁部外面に凹線が2条入り、体部内面に播り目を持つ。

9～13の時期は近世以降と考えられる。

③第3テラス

14・15はD地区第3テラストレンチ1-1整地土中から出土した土師質土器長胴甕である。口縁部が外傾し口縁端部を上方に摘み出す。14は外面にハケ目が確認できる。

14・15の時期は9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

3. まとめ

平成23年度より開始した、保存整備事業によって掘削を伴い現状が変更される箇所の確認調査については、いずれの箇所についても明確な遺構は確認できなかったことから、計画通りに施工することが可能となった。史跡内の保存整備事業は本年度で終了するが、史跡外の保存整備事業は継続される。今後は保存整備の意義を踏まえ、基本計画で策定さ

れた事項を確認しながら、普及・活用活動について具体的に検討していきたい。

D地区の試掘調査については、第1～3テラスのトレンチ調査で、柱穴や礎石、基壇状石組群などの遺構や、中世から近世にかけての遺物を多数確認した。第1テラストレンチ1 SP01から出土した須恵器壺1は、A地区塔跡の心礎石下より出土した須恵器(琴南町内遺跡発掘調査報告書第1集中寺廃寺跡平成16年度第16図)と類似しており、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

中寺廃寺の変遷としては、8世紀後半よりB地区で大川山信仰に根ざす活動が開始され、9世紀後半～9世紀末にA・B地区にて仏堂(掘立柱建物)・大炊屋・割拝殿もしくは仏堂・僧房が造営される。10世紀前半になるとA・B地区にて仏堂(礎石建物)・塔が造営され、C地区では石を組む民間信仰も始まり、寺院としての機能を整えた繁栄期を迎える。12世紀に入ると各地区とも遺物が数点見られるのみで、寺院は衰退・廃絶したとみられる。

したがって、中寺廃寺がB地区からA～C地区に広がり、多様な施設を造営し山林寺院としての機能が整った段階において、D地区においても何らかの施設が造営されていたと考えられ、時期から見ても両地区の間に強い関連性が認められる。しかし、現時点では調査範囲が非常に限定されているため、遺構の時代や性格は不確定である。また、D地区は西側に尾根を背にして東側の谷に向かって開けているA地区と類似したテラス配置をしており、B地区と同じく大川山を東に一望できることから、A・B地区の要素を一カ所で完結させているとも推定できる。第1テラスにおいて他の地区には見られない基壇状の石組を確認したことを併せると、基壇を持つ施設が存在した中寺廃寺跡の中でも重要な意味合いを持つ地区であった可能性が高いと考えられる。

しかし、本年度の発掘調査によって得られたデータは広大な遺構分布地の内の極僅かであり、推測を補強する程度で、遺跡を分析するためにはさらなる調査が必須である。

調査後、D地区が国有林内の周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、香川県教育委員会生涯学習・文化財課と四国森林管理局香川森林管理事務所の協議の上、森林管理事務所の植栽業務上可能な面積である①第1・2テラスの基壇状石組群が連続している範囲、②第1テラストレンチ3で検出した礎石とその周辺、③第1テラス南西寄りの直径約3mの楕円形盛土の以上3か所の植栽を避け、その他のテラス部分は植栽作業時など現状が変更される場合は立会を行うという処置を取ることとなった。町としては史跡の追加指定の可能性を秘めたD地区の調査を諦めず、新しい植林の根が遺構面に届くまでに、おそらく10～20年の単位になるであろうと思われるが、解決策を模索していきたい。

第1表 土器観察表

報文 番号	図版 番号	種別・器種	調査 地区	出土地点	出土層位	法量(cm)			残存量	胎土	色調		調整		備考
						口径	底径	器高			外面	内面	外面	内面	
1	30	須恵器・壺	D	第1テラス トレンチ1 SP01	柱穴埋土	—	11.0	—	底部1/8	砂粒細砂少	N5/灰	N4/灰	ヘラ切り、ナ デ	ナデ	
2	30	須恵器・甕	D	第1テラス トレンチ3	基壇整地土	—	—	—	体部1/8以下	砂粒細砂並	7.5Y6/2灰オ リーブ	5Y4/1灰	格子叩き	ナデ	
3	30	土師質土 器・土釜	D	第1テラス トレンチ2	地山直上	—	—	—	体部1/8以下	石英・長石粗 砂並、 砂粒中砂多	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	ナデ	指押え	
4	30	土師質土 器・土釜	D	第1テラス	表採	27.2	—	—	口縁部1/8以 下	石英・砂粒粗 砂多	10YR8/4浅 黄橙	10YR8/4浅 黄橙	ナデ	ナデ	
5	31	土師器・焙 烙	D	第1テラス トレンチ2	流土	41.5	17.8	5.9	口縁部・体 部・底部1/8	長石粗砂少、 砂粒細砂並	10YR3/1黒 褐	7.5YR4/2灰 褐	ナデ	ナデ	
6	31	瓦質土器・ 羽釜	D	第1テラス トレンチ2	流土	16.3	—	—	口縁部1/8以 下	石英・長石細 砂少	2.5Y6/3にふ い黄	10YR5/3に ぶい黄橙	ナデ	ハケ目、ナデ	
7	31	瓦質土器・ 羽釜	D	第1テラス トレンチ3	腐植土	19.4	—	—	口縁部1/8以 下	砂粒細砂多	2.5Y5/2暗灰 黄	2.5Y5/3黄褐	指押え、ナデ	ハケ目、ナデ	
8	31	瓦質土器・ 羽釜	D	第1テラス トレンチ3	流土	—	—	—	体部1/8以下	砂粒細砂並	10YR6/4に ぶい黄橙	10YR6/4に ぶい黄橙	ナデ	指押え	耳部(穿孔)
9	31	瓦質土器・ 羽釜	D	第2テラス トレンチ1- 1	流土	17.6	—	—	口縁部1/8以 下	石英中砂並	5Y5/1灰	5Y4/1灰	ナデ	ナデ	
10	31	瓦質土器・ 羽釜	D	第2テラス トレンチ1- 1	流土	—	—	—	体部1/8以下	石英・砂粒中 砂並	10YR6/4に ぶい黄橙	5Y4/1灰	ナデ	ナデ	
11	31	瓦質土器・ 羽釜	D	第2テラス トレンチ2- 2	表採	21.5	—	—	口縁部1/8以 下	長石粗砂少、 砂粒細砂並	10YR6/4に ぶい黄橙	2.5Y3/1黒褐	指押え、ナデ	ナデ	
12	31	磁器・碗	D	第2テラス トレンチ1- 2	流土	10.2	—	—	口縁部1/8以 下	砂粒細砂並	5Y6/2灰オ リーブ	10GY6/1緑 灰	ナデ	ナデ	内外面施軸
13	31	備前焼・播 鉢	D	第2テラス トレンチ1- 5	流土	32.9	—	—	口縁部・体 部1/8以下	砂粒粗砂多	5YR4/4にぶ い赤褐	5YR3/3暗赤 褐	ナデ	播り目	
14	32	土師質土 器・長胴甕	D	第3テラス トレンチ1- 1	整地土	36.0	—	—	口縁部1/8以 下	石英・長石・ 砂粒粗砂多	7.5YR5/6明 褐	7.5YR5/6明 褐	ハケ目、ナデ	ナデ	
15	32	土師質土 器・長胴甕	D	第3テラス トレンチ1- 1	整地土	33.5	—	—	口縁部1/8以 下	石英・長石・ 砂粒粗砂多	7.5YR5/6明 褐	7.5YR5/6明 褐	指押え、ナデ	ナデ	

第2表 石製品観察表

報文 番号	図版 番号	種別・器種	調査 地区	出土地点	出土層位	法量(cm)			残存量	材質	色調	備考
						最大幅	最大長	最大厚				
16	32	砥石	D	第1テラス トレンチ3	腐葉土	7.2	5.2	2.1	—	流紋岩	10YR6/3にぶい黄褐	A・B・C・D面研磨